第 2 分 科 会

親と先生のしゃべり場

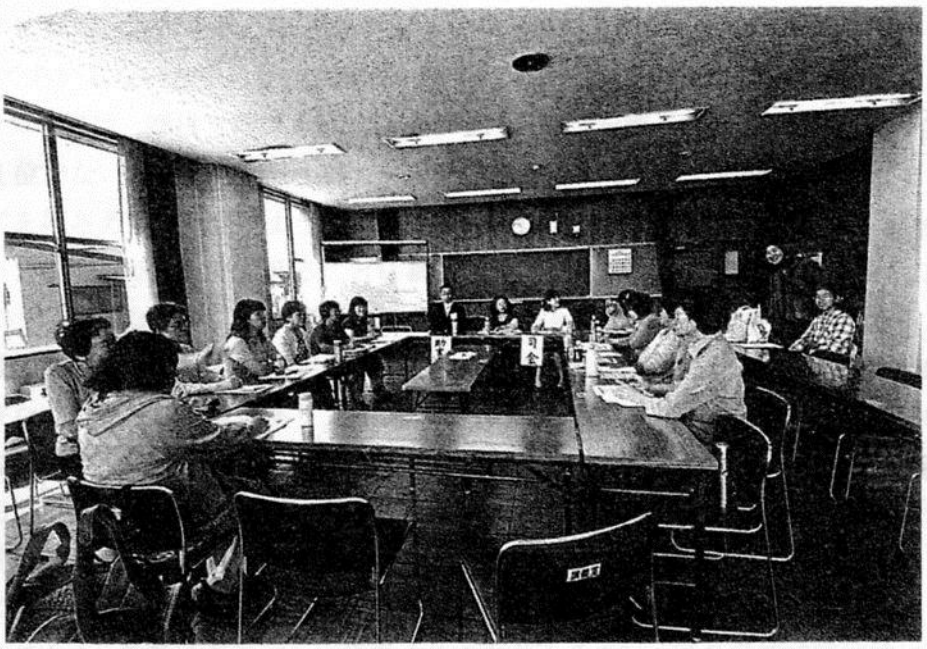
―「困っている子ども」と向き合って―

助言者　　木村　まき（新座中教員）

　　波多野　健（臨床心理士）

司会　　大谷　志保

記録　　樽見　多寿子



問題点

第二分科会

助言者紹介

◆木村　まき（新座中学校教員）

昨年まで第二中学校で教員をしており、同じ市内でも地域が変わると風土や雰囲気が違うと感じている。思春期・自立をしていく子ども達と向き合い楽しいが、最近ますます中学生の苦しい叫びを痛感している。

◆波田野　健（NPO 法人ロッコ　理事長　心理療法士）

発達障害を持っている方の小～中～高校の勉強を教えるという面から、成人の就労支援を実施している。その人の今までの生き方が社会で生きていく上で非常に影響していると思われる「育っていく中での課題」を解決し、有意義・充実感を味わえるようにしていく。

司会

◆大谷　志保

記録

◆樽見　多寿子

参加者紹介(計 14 名)

- 学童保育室　指導員　4 名
- 教員　4 名
- 元教員　1 名
- 学童保育の会　1 名
- 学童保育の会 OB　1 名
- 1 歳の母親
- 石神小、5 年と 3 年の祖母
- その他　1 名

問題点

- 相手が何もしていないのに挨拶がわりに後ろから蹴る子がいる。
- 弱い子に対して集中的に不快感を与える。
- 年々、指示待ちの子が増えている。
- 「○○がしたい」という主張がなく「別にない」「つまらない」という子が多い。
- 習い事など多忙なスケジュールのせいか余裕がない子が多い。
- 学童の狭いスペースや時間限定での外遊びなど、小学生という大切な時期に、果たしてこのような環境でよいのかという疑問が大きい。
- 「困っている」という子は、実はその子自身が一番困っている。その子が何に困っているかを理解し、支援する必要があるが、なかなか行動に出ず難しい。
- 狭いところを何も言わず通るなど言葉が出ない子がいる。言葉が出ても、突然乱暴な言葉になる子もいる。
- ある家庭で「都合により休みます」との連絡帳が届き、男子児童が休んだのでその男子児童に様子を聞くと、母親とケンカをしてランドセルを捨てられそうになり、さらに「あんたはダメな子ね」と言われたとのこと。
- 教師には言いやすいのか苦情が多い「困った母親」。
- 孫の姉弟ゲンカが激しい上、親じゃないからか突然罵声を浴びせてくる。解決策をアドバイスするが、すぐ戻ってしまいまたケンカ。その行動が理解できない。
- 20～30 年先ではなく、目先の解決をはかるような強すぎる指導をしてしまったのではないかと感じている。高いレベルではなく、その子に合った指導が必要。
- 授業中に私語・口笛を吹くなどをする児童がいる。注意をしても、先生に屈するのが嫌で 10 秒くらいしないとやめない。理由を聞くと「学校でリラックスしている」とのこと。週 6 サッカー浸け、選抜で期待されているのでストレスを感じていのではないか。
- 親が 1 位でないとダメという主義でストレスがかかっている。人を「いじめる」「足を出す」「ドアを押さえて開かないようにする」などの行為、先生に「何が？」「どうして？」と反発する言動を繰り返し怒らせることに喜びを感じている。心の奥底での不満や甘えがある。
- 最近の子の傾向なのか個々の問題なのか、問題のある子でも成績がよい。
- その場限りの嘘をついてごまかす子。生活リズムが乱れていて朝起きられない。だんだん連絡も来ない。母親にも波があり、「信頼できなくなった」と連絡がきたことも。
- 子育ては家庭と学校でやっていきましょうと伝えても、担任は 3 月までの契約なので憤りを感じる。親も相談する相手がいない。教師は 1 年間でどこまで子ども達と向き合えるのか、長期的に成長に関わることができない。
- 臨採にいたっては、1 年毎に学校を異動し、転々としたあげく数年後にまた同じ学校に戻ってくることも。教員は来年どこに異動するのかわからない。同じ学校で継続的に配置させる方がメリットがある。臨採をやめて教員の生活を安定させ、子ども達・保護者達との信頼関係を優先させるべき。

助言者のアドバイス

木村

中学校入学時に学生に話していることがある。
人生に必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んでいる：「何でもみんなと分け合う、ズルをしない、人をぶたない、使ったものは元の場所に返す、自分で後片付けをする、人のものに手を出さない、誰かを傷つけたらごめんなさいと言う、食事の前には手を洗う、トイレに行ったらちゃんと水を流す、釣り合いのとれた生活をする、それは毎日少し勉強し、少し考え、少し絵を描き、歌い、踊り、遊び、少し働くこと。おもてに出る時は車に気をつけ、手をつなぎ離ればなれにならない、不思議だなあと思う気持ちを大切にすること。(引用)」を話し、自分の現在地はどこだと問いかけている。
戦後～団塊の世代～現代と時代がうつっていくに従い、しきたり、価値観、考え方、家族のカタチなども変わってきているが、伝授されるべきものがきちんと伝授されていないと感じる。
挨拶は父母が家庭できちんとしていれば自然と身に付く。両親が忙しいという事情や子育てをしていく上で便利なものに頼ってしまうのもわかるが、大人にとって便利なものでも育っている最中の子どもにとっては弊害になってしまうものがあり、そのひずみがカタチとなって現れているのではないか。また、子どもにとってすべては大人がモデルである。大人が大人同士つながっていないと子どもに社会力は育たない。今いちど家族で朝食を摂ったり、家庭の中で子どもの様子を聞いたり、自らの考えを言わせ、言わせたら責任を持たせるなど適時な発達段階で適時な手を伸ばす・時間・空間・考えることが必要。

波田野

色々なことを模索し、うまくいったものは続けるといったことを実践されており、それは困った子どもにとっては困った中でも恵まれた環境である。
未来に目を向けてみると、仕事を長く続けられる人・続けられない人の大きな違いは「自分に何ができるのか、強み長所を自覚しているか」である。それがあれば働くタイミング・職種・こういう面で活かしたいという考えが生まれてくる。また、失敗やストレスに対して一時的に落ちることはあっても対処できる。一方、自分の長所を見つけにくい人は自分の短所に目が向きやすく、失敗したときは自分のせいではないかと必要以上に自分のせいにしてしまう。また、人の意見は素直に受け入れやすく、人のネガティブな指摘がそのまま自己評価となってしまうことも多い。ひとは幼稚園～小学校～中学校(高校大学)と学校生活を経て性格が形成される。よって、子どもの時期に「やってはいけないこと」などを指摘する際、同時に何ならできるのか、現在やれていること、努力していることも指摘してあげることが大切。よいところとなおしていくところのバランスが必要。
また、子どもの抱えている問題に対して、うまくいっているところを想像し続ける努力が本人

以上に周りの努力が必要であり、その子(事柄)のよいところを3つ言えることが大事。よいところを探すのは難しいので、まずは毎日思いつく感謝を5つ書きとめていくことを勧めている。5つとなるとごはんや布団があることなど当たり前のことにも目を向け、当たり前のことが当たり前にあるというありがたさに目を向けることになり、自分も楽・まわりの人も柔らかくなっていくという相乗効果がある。理不尽なことが多い社会だからこそ柔らかい環境の中で育った弾力性・柔軟性が必要であると考える。

市への要望事項

1　全学年少人数制(30人学級)を導入して下さい。
2　臨時採用教員の廃止による地域に根ざした教員配置をして下さい。
3　市内小・中学校の公平性の確保(税金を各学校均等に使用して下さい)
4　学童保育室の狭隘化対策ではなく、保育室を増設して下さい。
5　中高生の利用できる児童館を設置して下さい。

申し合わせ事項

気付いたところで声に出していきましょう。
そして各方面(教師、学童、親)協力して解決していきましょう。